

「こころが」 聞きたい

生活様式の変化で畳の需要が減少し、県内の畳職人も1980年のピーク時から4分の1になった。高齢化による後継者不足もあり、業界は苦境に立たされている。今年70周年を迎えた県畳業組合の金善悦理事長に、業界の現状や今後の展望を聞いた。

―組合の活動内容は。

「職人の情報交換の場として総会を開いているほか、技術を伝承しようと県職業能力開発協会主催の『ものづくりふれあいフェア』で子どもにミニ畳作りを指導している。前身の法人組織・県畳商工組合（1998、2010年）時代には、公共事

進む畳離れ



業を受注して組合員に分配したり、資材を共同購入したりして

分まで減少した。事業を継続できているだけ、ましな方だと

魅力伝える営業必要

いた」

―職人数や売り上げはどのような状況か。

「職人は1980年の335人をピークに右肩下がり。現在80人いる職人もほとんどが65歳以上の高齢者で、今後減るだろう。売り上げについては、自分の店の場合、ここ30年で約半

思う」

―新規参入する若者はいないのか。

「家業を継いで職人になる人がほとんど。一から始めようとする若者がいたら『考え直した方がいい』と助言する。工場の確保や機械の導入に1千万円以上の初期投資がかかり、開店後も顧客の確保に苦労することになる。技術を受け継ぐ若い世代は必要だが、無責任に受け入れ

るわけにもいかない」

―需要が減った要因は。

「生活様式が変化した影響が大きい。住宅の洋風化で床材はフローリングが主流になり、和室のない家も珍しくなくなっ

設した。各店の住所と電話番号を載せており、畳屋を探す際に利用してもらえればと思う。HPを閲覧して注文した顧客はまだ数人だが、少しずつ周知していく」

―今後の展望は。

「畳が消えることはないと思うが、黙っていても定期的に注文が来る時代は過ぎた。職人が生き残るためには意識変革が必要で、畳の良さを積極的に伝える営業力を備えないといけない。例えば、畳が衛生面で優れることはあまり知られていない。表面のイ草には抗菌作用があり、数年ごとに『裏返し』や『表替え』を行うことで新品同様の清潔な状態を保てる。畳ならではの魅力をPRすること」

「組合は昨年、顧客の確保に向けて組合員業者の一覧を表示するホームページ（HP）を開いた」（聞き手＝佐藤悠大）

こん・ぎえつ 47年4月、秋田市生まれ。秋田市立高現秋田中央高）卒。父義八郎さんが開業した金畳店（同市川尻新川町）で67年から働き、98年同店代表。13年県畳業組合理事長。同市茨島住。